

第2回テーマ：主な経営部門における構造変動の特徴と経営展開

肉用牛経営の構造変化と経営展開

－和牛飼養経営体に着目して－



農林水産政策研究所 農業・農村領域

大橋めぐみ・橋詰 登

1. 分析の課題と方法

(1) 研究の背景と分析課題

- 近年，小規模な高齢農家による和牛繁殖経営の離農や肉用牛部門からの撤退が続き，和牛の飼養頭数は長期的に減少傾向にあった
- こうした中，繁殖牛(子取り用めす牛)の飼養頭数は2016年頃から回復の兆しをみせ(左図)，2020年センサスでは前回センサスから5万頭増加(9.7%増)する動きがみられた(右表)

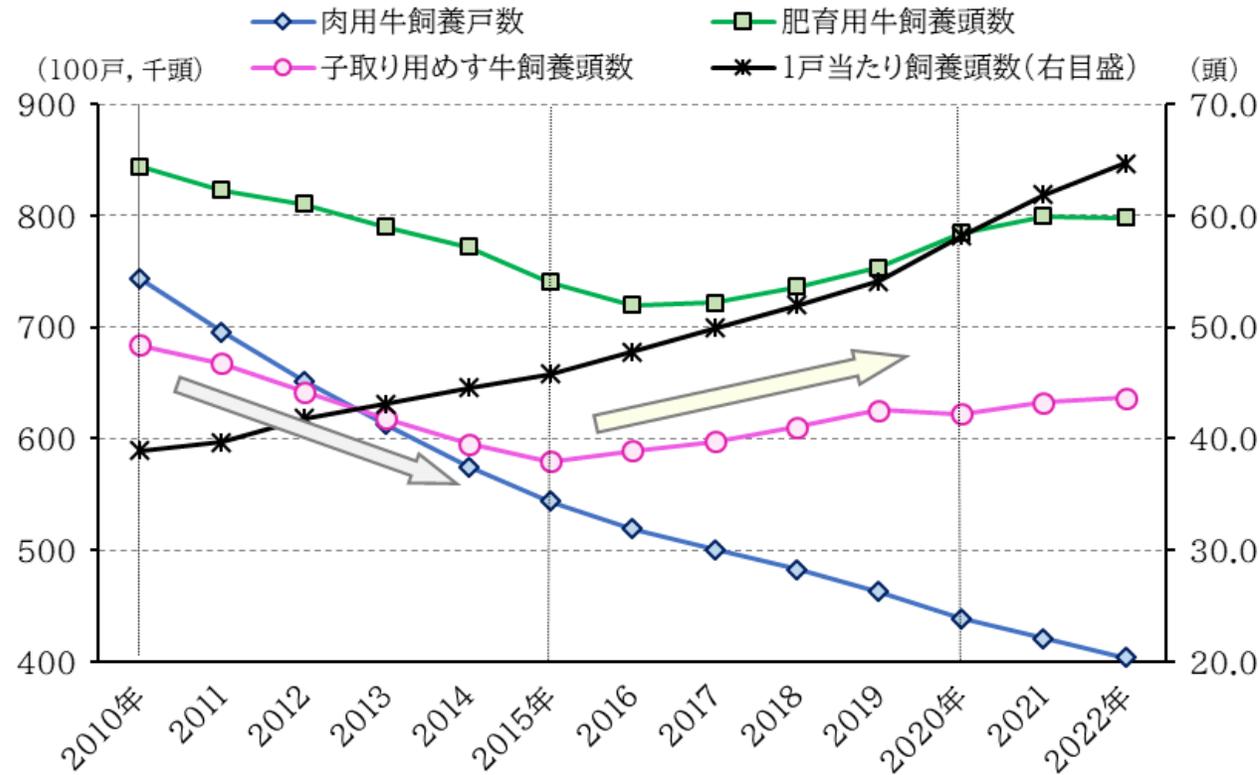


図1 肉用牛飼養戸数及び飼養頭数の(全国:畜産統計)

資料: 畜産統計調査(累年統計).

表1 肉用牛を飼養する農業経営体数及び飼養頭数の推移 (全国:農林業センサス)

	年	肉用牛飼養経営体数	繁殖経営	肥育経営	一貫経営	飼養頭数	肉用種(和牛)		
			(子取り用めす牛のみ)	(肥育中の牛のみ)	(両方)		子取り用めす牛	肥育中の牛	
		経営体	経営体	経営体	経営体	千頭	千頭	千頭	千頭
実数	2010年	63,678	49,096	7,485	7,097	1,957	1,285	594	691
	2015年	45,763	34,656	5,800	5,307	1,794	1,190	521	670
	2020年	36,721	28,024	4,262	4,435	1,784	1,241	571	669
増減数	10-15年	-17,915	-14,440	-1,685	-1,790	-163.7	-95.3	-73.9	-21.5
	15-20年	-9,042	-6,632	-1,538	-872	-9.9	50.5	50.5	0.0
増減率	10-15年	-28.1%	-29.4%	-22.5%	-25.2%	-8.4%	-7.4%	-12.4%	-3.1%
	15-20年	-19.8%	-19.1%	-26.5%	-16.4%	-0.6%	4.2%	9.7%	0.0%

資料: 農林業センサス農林業経営体調査報告書-農業経営部門別編-(2010年, 2015年, 2020年).

(1) 研究の背景と分析課題 (つづき)

- 2000年センサスでの飼養頭数の増加は, ①繁殖農家の規模拡大(増頭), ②肥育農家での繁殖和牛の導入, ③他の畜種を飼養する経営体や耕種農家による和牛生産への参入, ④新規就農者による和牛生産の開始などの様々な動きが重なりあって生じていると推察される
- 今回の分析では, どのような経営体がこの5年間に繁殖和牛の量的な増加に寄与したのか, 牛を飼養する経営体の類型化(2種類)を図り, 飼養頭数の増加要因を分析する
- また, 草地資源の有効活用を図り飼料自給率を向上させることも和牛生産の課題となっており, 農業センサスでの分析では限界があるものの, 飼料生産に着目した分析も行う
- さらに, 飼養頭数や飼料生産基盤の拡大を図るためには労働力の確保が重要となることから, 各経営タイプの保有農業労働力(農業従事者の年齢別等)にも着目し分析する

(2) 分析の方法

- 牛を1頭以上飼養する農業経営体の個票データ（2010年から2020年まで）を利用し、牛の飼養形態により以下のように経営体を類型化（【飼養類型】）
 - まず、飼養している牛の組み合わせから、「和牛のみ」「和牛・他肉用」「酪農・和牛」「酪農・他肉用」「他肉用」「酪農」の六つに区分
 - 「和牛のみ」については、繁殖和牛（子取り用めす牛）のみを飼養する「和牛繁殖」、和牛の肥育牛のみを飼養する「和牛肥育」、両者を飼養する「和牛一貫」の三つに細分
 - 「酪農」を除く七つの類型を分析対象とし、特に「和牛のみ」の3類型について詳細に分析

表2 飼養する牛の種類による類型化の基準

	和牛のみ			和牛・他肉用 n=1,257	酪農・和牛 n=3,270	酪農・他肉用 n=2,295	他肉用 n=1,213	(酪農) n=8,227
	和牛繁殖 n=26,050	和牛一貫 n=3,835	和牛肥育 n=2,158					
(n=2020年の飼養経営体数)								
販売目的で和牛などの肉用種を飼養	○	○	○	○	○	×	×	×
うち、子取り用めす牛がいる	○	○	×	×	×	×	×	×
うち、肥育中の牛がいる	×	○	○	×	×	×	×	×
販売目的で和牛と乳用種の交雑種 又は肉用の乳用種を飼養	×	×	×	○	○	×	○	×
搾乳目的の牛を飼養	×	×	×	×	○	○	○	×

2. 肉用牛を飼養する経営体の動向

(1) 各飼養類型の生産概要

- 肉用牛を飼養する経営体数は全ての飼養類型で引き続き**減少**，「和牛・他肉用」「酪農・他肉用」で**3割**を超える高い減少率
- 飼養頭数は和牛のみ3類型合計で**4.6%の増加**（前回は**10.6%減**），増加率が高いのは「和牛一貫」で**18.5%増**（繁殖和牛に限ると**26.3%増**）

表3 販売目的で肉用牛を飼っている各飼養類型の生産概要

		計	和牛のみ	和牛繁殖	和牛一貫	和牛肥育	和牛・他肉用	酪農・和牛	酪農・他肉用	他肉用	
飼養経営体数	実数 (千経営体)	2010年	66.8	54.6	45.3	5.7	3.7	2.1	5.5	2.7	1.8
		2015年	51.0	39.5	32.1	4.4	2.9	1.8	4.2	3.9	1.6
		2020年	40.1	32.0	26.1	3.8	2.2	1.3	3.3	2.3	1.2
	増減率 (%)	10-15年	△ 23.6	△ 27.8	△ 29.0	△ 21.8	△ 21.5	△ 14.4	△ 23.7	43.8	△ 10.5
		15-20年	△ 21.4	△ 18.8	△ 18.9	△ 13.2	△ 26.2	△ 30.6	△ 22.0	△ 40.7	△ 25.5
飼養している牛の総頭数 (搾乳目的を含む)	実数 (万頭)	2010年	300.1	137.1	61.6	40.2	35.3	42.9	45.4	27.2	47.5
		2015年	287.9	122.5	53.4	36.5	32.6	41.3	44.1	34.3	45.7
		2020年	278.3	128.2	54.6	43.3	30.3	36.4	48.2	26.5	39.1
	増減率 (%)	10-15年	△ 4.1	△ 10.6	△ 13.4	△ 9.2	△ 7.5	△ 3.8	△ 2.9	26.3	△ 3.8
		15-20年	△ 3.4	4.6	2.3	18.5	△ 7.1	△ 11.8	9.3	△ 22.9	△ 14.6
繁殖和牛 (子取り用のめす和牛)頭数	実数 (万頭)	2010年	59.4	52.1	38.4	13.7	/	2.7	4.7	/	/
		2015年	52.1	44.9	33.5	11.4	/	3.0	4.1	/	/
		2020年	57.1	49.4	35.0	14.4	/	3.1	4.6	/	/
	増減率 (%)	10-15年	△ 12.4	△ 13.7	△ 12.8	△ 16.4	/	12.3	△ 11.9	/	/
		15-20年	9.7	10.0	4.5	26.3	/	1.7	12.2	/	/

資料：農林業センサス個票(2010年, 2015年, 2020年)の組替集計.

(2) 和牛のみ3類型の経営動向

- 小規模な経営体で飼養経営体数及び飼養頭数が減少する一方、大規模層では経営体数及び飼養頭数が増加（「和牛肥育」の経営体数を除く）
- 「和牛繁殖」の20～49頭規模層、「和牛一貫」の50～199頭規模層では経営体数、飼養頭数ともに減少から増加に

表4 和牛のみを飼養する3類型(和牛3類型)の飼養頭数規模別の経営動向

類型	飼養頭数規模	飼養経営体数					繁殖和牛(子取り用めす牛)飼養頭数					肥育和牛(肥育中の牛)飼養頭数				
		飼養経営体数(経営体)			増減率(%)		実数(千頭)			増減率(%)		実数(千頭)			増減率(%)	
		2010年	2015年	2020年	10-15年	15-20年	10年	15年	20年	10-15年	15-20年	10年	15年	20年	10-15年	15-20年
和牛繁殖	計	44,887	31,414	25,641	△ 30.0	△ 18.4	384	335	350	△ 12.8	4.5	X				
	20頭未満	40,370	26,991	20,584	△ 33.1	△ 23.7	214	152	128	△ 28.7	△ 16.2					
	20～49頭	3,746	3,522	3,895	△ 6.0	10.6	108	104	115	△ 3.7	11.1					
	50～199頭	743	865	1,105	16.4	27.7	53	63	80	19.0	27.3					
	200頭以上	28	36	57	28.6	58.3	9	15	26	64.1	70.2					
和牛一貫	計	5,653	4,418	3,835	△ 21.8	△ 13.2	137	114	144	△ 16.4	26.3	206	196	228	△ 4.6	16.2
	20頭未満	3,014	2,232	1,533	△ 25.9	△ 31.3	16	12	8	△ 25.6	△ 33.9	8	6	5	△ 19.5	△ 15.2
	20～49頭	1,153	906	815	△ 21.4	△ 10.0	24	18	16	△ 23.9	△ 10.8	12	10	10	△ 17.2	△ 6.0
	50～199頭	1,195	979	1,073	△ 18.1	9.6	49	41	53	△ 16.5	27.8	65	55	53	△ 15.1	△ 4.5
	200～499頭	217	227	295	4.6	30.0	15	18	27	19.5	53.3	48	45	58	△ 6.0	28.5
500頭以上	74	74	119	0.0	60.8	33	25	41	△ 22.5	60.1	72	79	102	9.4	29.0	
和牛肥育	計	3,723	2,924	2,158	△ 21.5	△ 26.2	X					353	326	303	△ 7.5	△ 7.1
	20頭未満	1,423	1,001	676	△ 29.7	△ 32.5						10	7	5	△ 32.4	△ 24.5
	20～49頭	769	570	424	△ 25.9	△ 25.6						24	18	14	△ 24.8	△ 24.5
	50～199頭	1,096	943	683	△ 14.0	△ 27.6						106	95	68	△ 10.4	△ 28.4
	200～499頭	336	298	276	△ 11.3	△ 7.4						94	83	77	△ 12.0	△ 6.9
500頭以上	99	112	99	13.1	△ 11.6	119	124	139	4.1	12.6						

資料：農林業センサス個票(2010年, 2015年, 2020年)の組替集計.

(3) 飼料生産基盤

- 和牛のみ3類型合計の牧草専用地面積は2015年の4.8万haから**6.0万ha**へと**23.9%**増加，1経営体当たり面積も1.2haから**1.9ha**へ
- 耕地以外の土地面積も，全飼養類型で**増加**

表5 販売目的で肉用牛を飼養する各飼養類型の飼料生産基盤

			和牛のみ	和牛繁殖	和牛一貫	和牛肥育	和牛・他肉用	酪農・和牛	酪農・他肉用	他肉用
飼料畑 (飼料用作物だけを作った畑)	面積計 (100ha)	2010年	204	161	39	4	16	140	84	13
		2015年	161	127	30	4	11	120	149	16
	増減率(%)	10-15年	△ 21.4	△ 21.3	△ 24.0	2.1	△ 28.6	△ 13.7	78.2	22.0
	1経営体当たり面積 (a)	2010年	37	36	70	10	75	254	311	72
		2015年	41	39	68	14	63	287	386	98
畑のうち、 牧草専用地	面積計 (100ha)	2010年	464	321	130	13	47	534	351	53
		2015年	483	319	125	38	57	524	580	60
		2020年	598	413	159	26	63	551	451	72
	増減率 (%)	10-15年	4.1	△ 0.7	△ 3.4	199.2	21.2	△ 1.8	65.4	12.8
		15-20年	23.9	29.3	27.2	△ 32.4	10.1	5.1	△ 22.3	20.5
1経営体当たり面積 (a)	2010年	85	71	229	34	223	973	1,304	290	
	2015年	122	99	283	131	315	1,251	1,500	366	
	2020年	187	158	415	120	500	1,685	1,964	591	
耕地以外の土地 (採草・放牧地)	面積計 (100ha)	2010年	70	50	17	3	4	13	8	3
		2015年	86	68	16	2	3	18	9	3
		2020年	104	71	27	7	4	27	14	3
	増減率 (%)	10-15年	22.5	35.6	△ 8.2	△ 29.4	△ 23.3	33.8	16.2	14.8
		15-20年	21.6	3.5	71.1	270.2	37.9	47.1	44.7	5.1
	1経営体当たり面積 (a)	2010年	13	11	30	7	17	25	30	15
2015年		22	21	35	6	15	43	24	20	
2020年		33	27	69	32	30	81	59	28	

資料：農林業センサス個票(2010年, 2015年, 2020年)の組替集計。

注. 飼料畑面積は, 2020年センサスでは調査されていない。

(3) 飼料生産基盤 (つづき)

- 「和牛繁殖」経営における牛1頭当たりの平均牧草専用地面積は、2005年の4.8aから年々増加し、2020年では**11.8a**と2倍以上
- 減少を続けていた飼料畑面積は今回増加に転じているのか？（2000年センサスで調査項目がなくなったため確認できないのが残念）

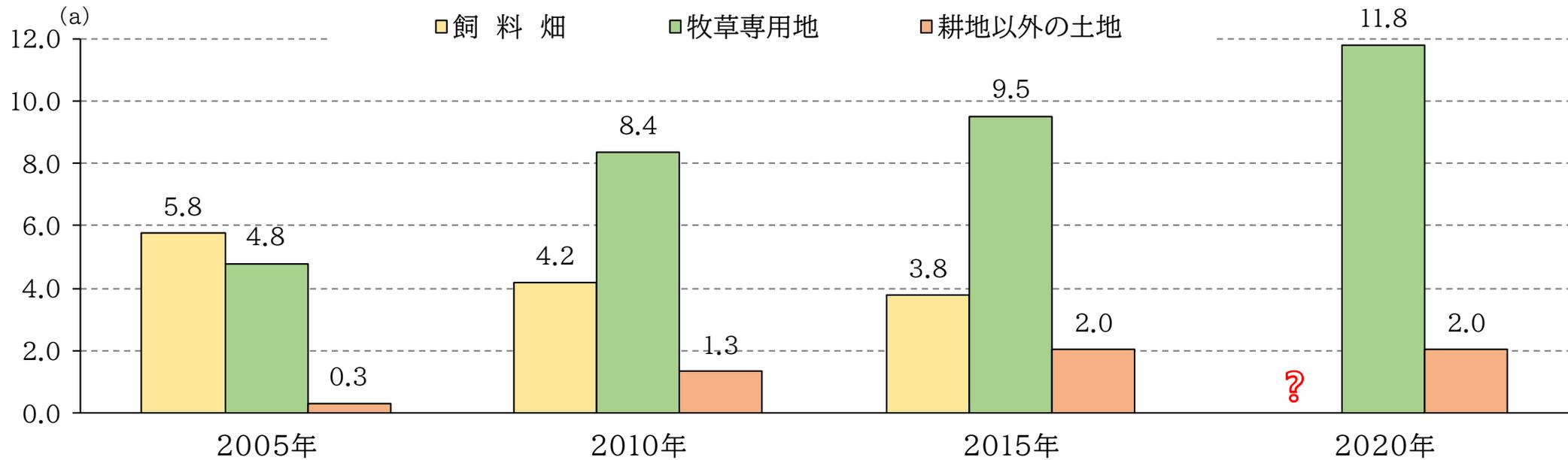


図2 「和牛繁殖」類型の繁殖和牛1頭当たり飼料畑, 牧草専用地等面積の推移

資料：農林業センサス個票(2005年, 2010年, 2015年, 2020年)の組替集計.

注. 2020年の飼料畑面積は調査されていないためデータがない.

(4) 和牛のみ3類型の肉用牛部門販売額

- 1経営体当たり平均肉用牛部門販売額（推計額）は、この5年間に「和牛繁殖」で391万円→691万円、「和牛一貫」で2,649万円→4,743万円、「和牛肥育」で6,291万円→8,573万円、飼養頭数20頭未満の小規模な「和牛繁殖」は2020年でも309万円

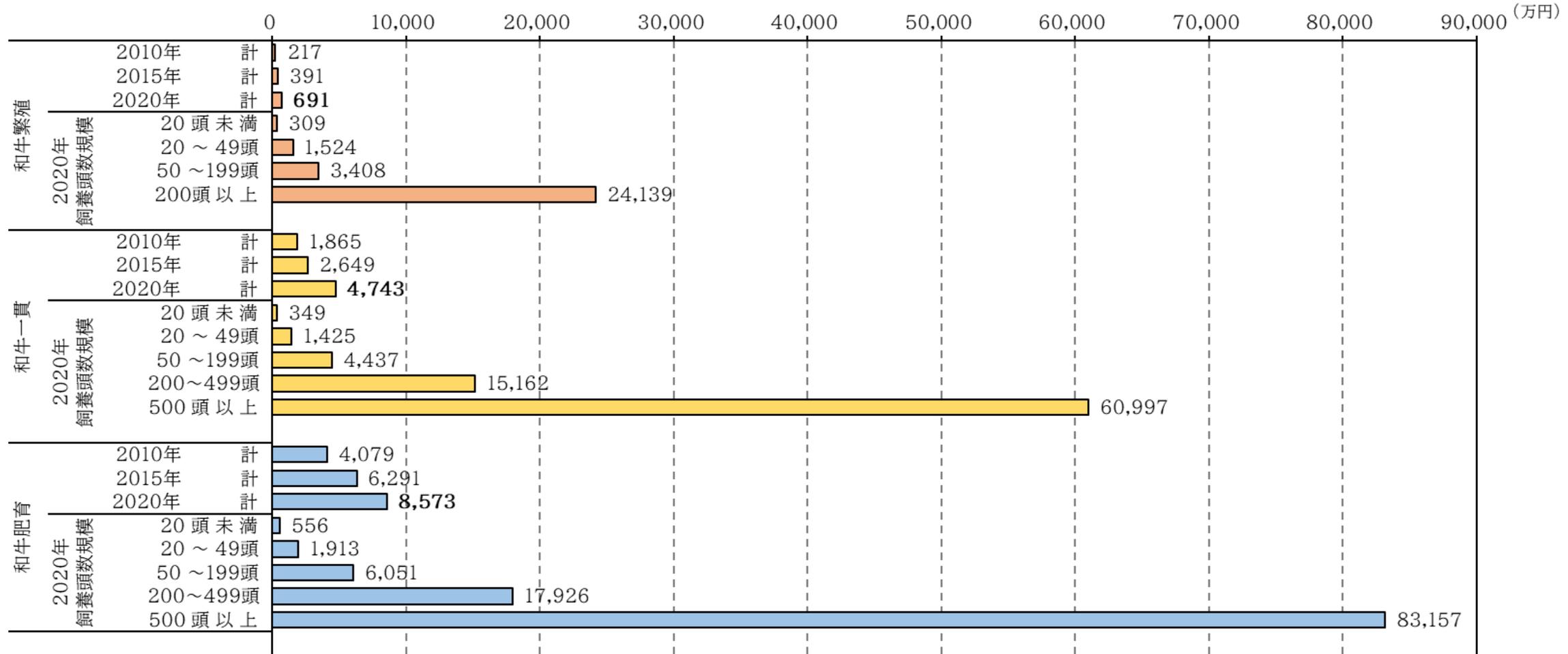


図3 和牛3類型の1経営体当たり平均肉用牛部門販売額（推計額）

資料：農林業センサス個票(2020年)の組替集計.

(5) 農業労働力の保有状況

- 乳用種を含む「酪農・和牛」と「他肉用」には、**8割以上**の経営体に65歳未満農業専従者、**約半数**の経営体には30~49歳の若い専従者がいる
- これに対し、小規模な家族経営が多い「和牛繁殖」では、これら経営体割合がそれぞれ**44.9%**、**15.5%**と低い

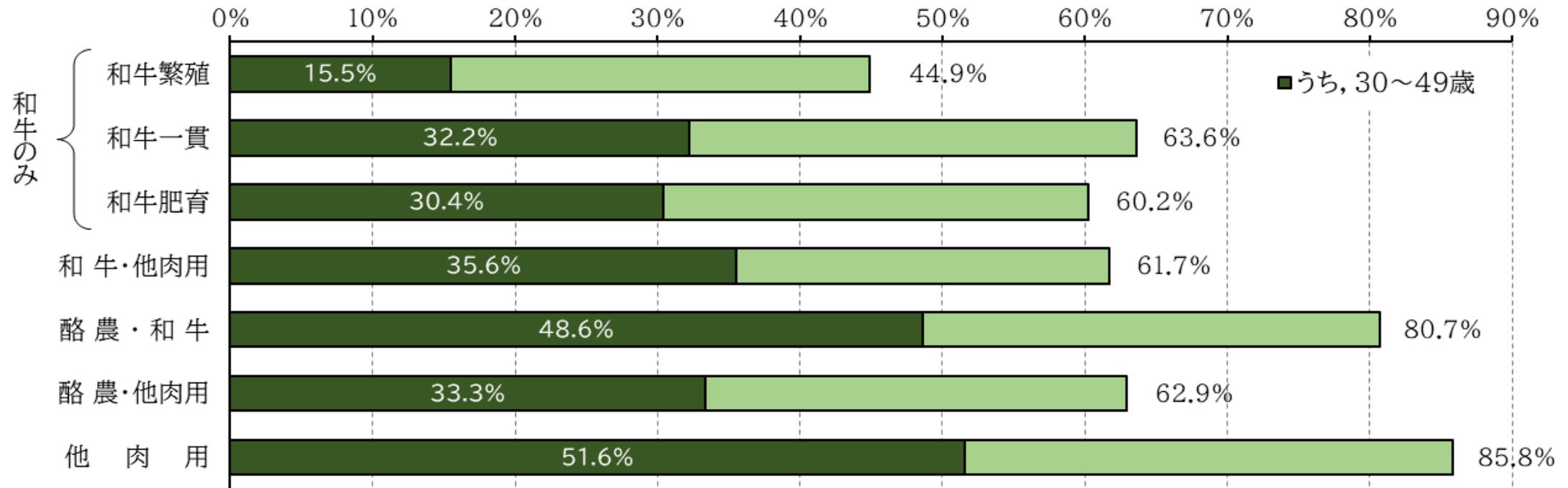


図4 飼養類型別の65歳未満農業専従者がいる経営体割合

資料:農林業センサス個票(2020年)の組替集計.

注.「農業専従者」は、年間150日以上農業に従事した者である.

(6) 和牛のみ3類型の保有農業労働力

- 1経営体当たり平均農業従事者数は、「和牛一貫」及び「和牛肥育」で男性が2.0~2.1人、女性が1.2人、合計**3.2人**程度、「和牛繁殖」は従事者数がやや少なく男性が1.4人、女性が1.0人、合計**2.4人**
- 「和牛繁殖」では、農業従事者の約半数が65歳以上であり、高齡化が進んでいる

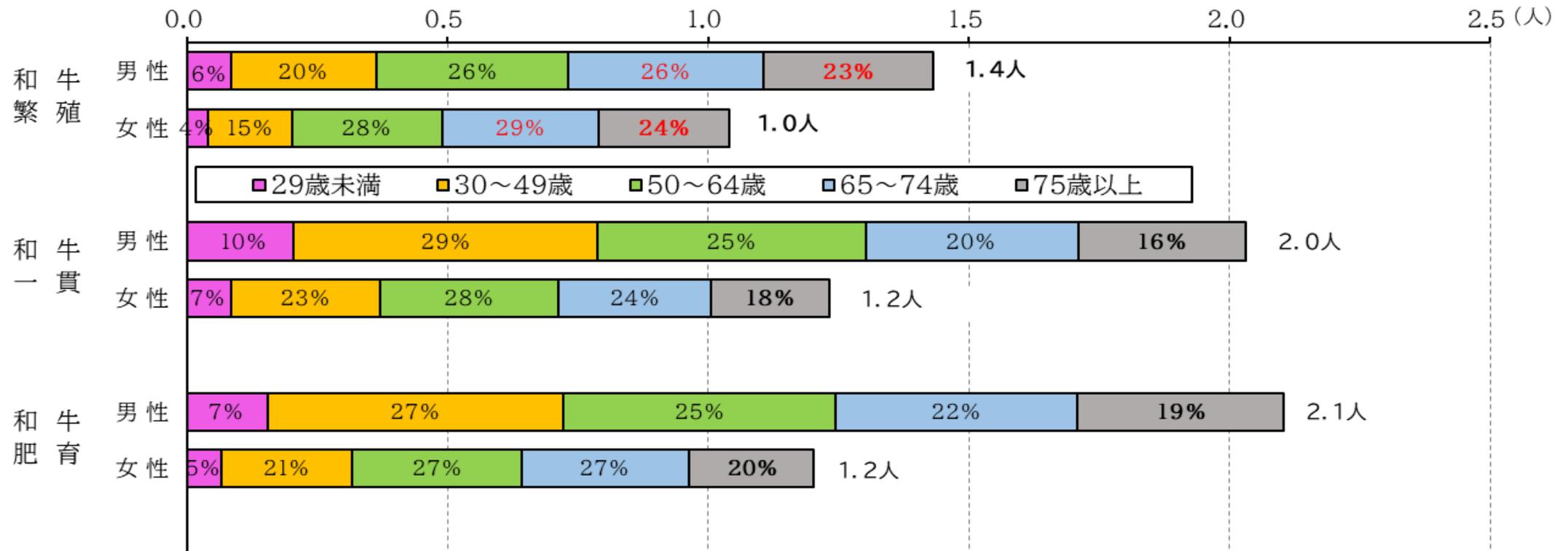


図5 和牛3類型の1経営体当たり年齢別平均農業従事者数

資料:農林業センサス個票(2020年)の組替集計。

注.「農業従事者数」は、1日以上農業に従事した世帯主・世帯員、団体経営体の役員・構成員、常雇の合計である。

(6) 和牛のみ3類型の保有農業労働力 (つづき)

- 3類型ともに65歳未満農業専従者がいる経営体割合は、飼養頭数規模が大きい経営体ほど高く、50頭を超える規模層で6~7割程度、20~49頭規模層で3~4割程度、20頭未満規模層では1割程度 → 規模が小さい経営体ほど高齢化が進んでいる

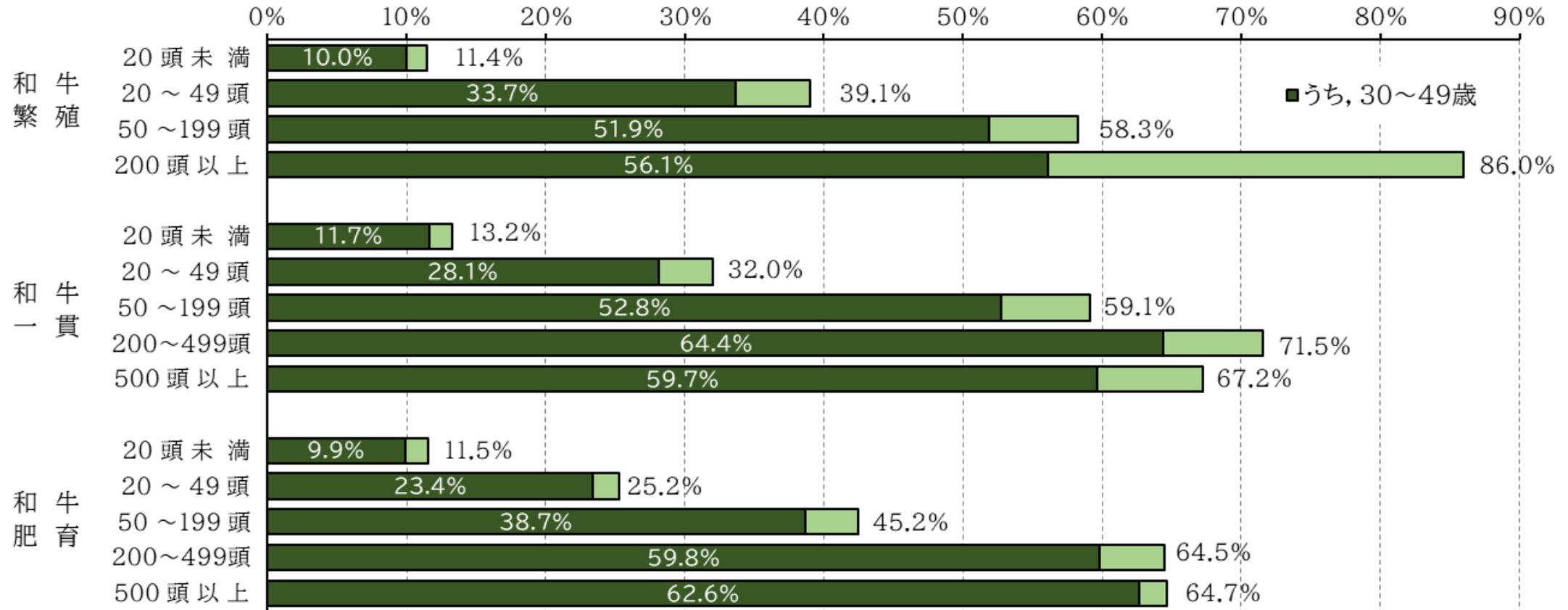


図6 和牛3類型の飼養頭数規模別の65歳未満農業専従者がいる経営体割合

資料:農林業センサス個票(2020年)の組替集計。

注。「和牛繁殖」の飼養頭数500頭以上規模階層は戸数が極めて少ないため200頭以上とした。

3. 和牛のみ3類型への経営変化

(1) 和牛のみ3類型間での変化 (2015年→2020年)

- 大規模(200頭以上)な「和牛繁殖」経営では約2割が「和牛一貫」に ← 肥育部門を導入
- 小規模(20頭未満)な「和牛一貫」経営の過半が「和牛繁殖」に ← 繁殖部門に資源を集中
- 「和牛肥育」経営では、50頭以上規模層で1~2割が「和牛一貫」に ← 繁殖和牛を導入

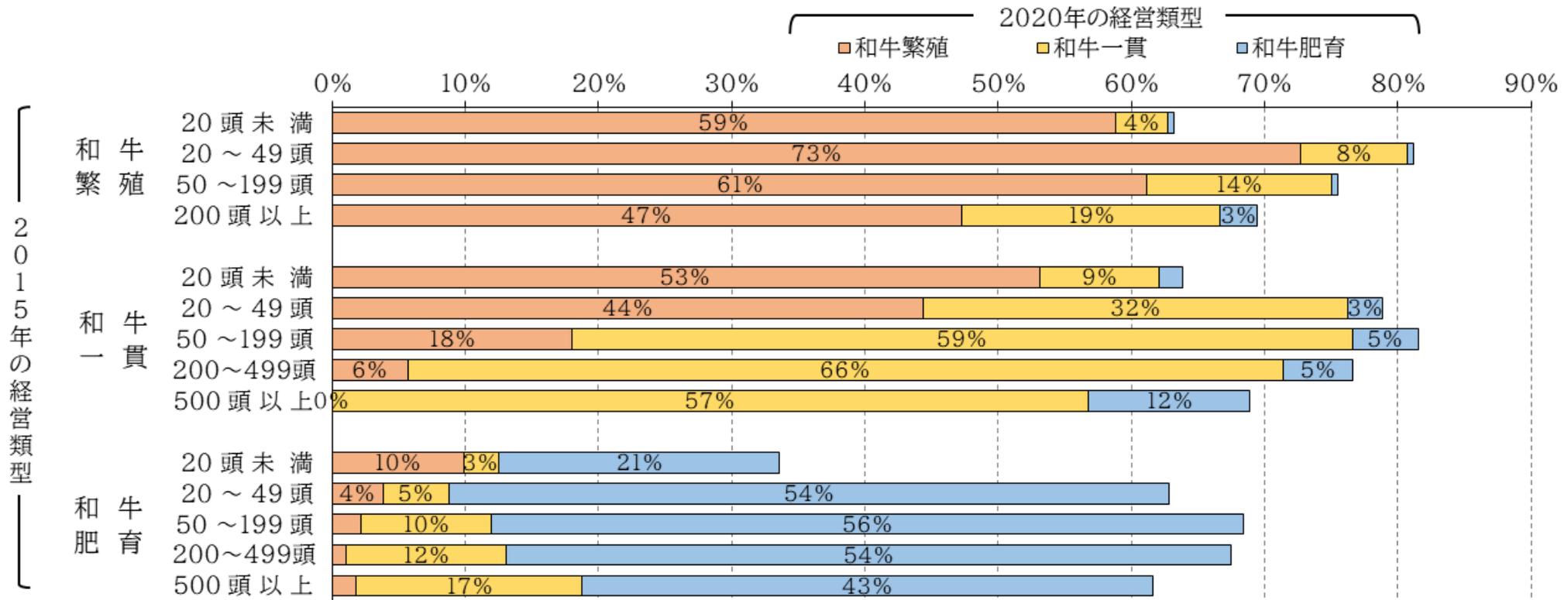


図7 和牛3類型への経営変化 (2015年:和牛3類型→2020年:和牛3類型)

資料:農林業センサス個票(2015年,2020年)の組替集計。

注。「和牛繁殖」の飼養頭数500頭以上規模階層は戸数が極めて少ないため200頭以上とした。

(2) 和牛のみ3類型以外からの参入 (2015年→2020年)

- 「和牛・他肉用」の20頭未満及び20～49頭規模層, 「酪農・和牛」の20頭未満規模層では, **半数**近い経営体が「和牛繁殖」に変化
 → 中小規模の家族経営で経営を維持するために「和牛繁殖」に転換か？

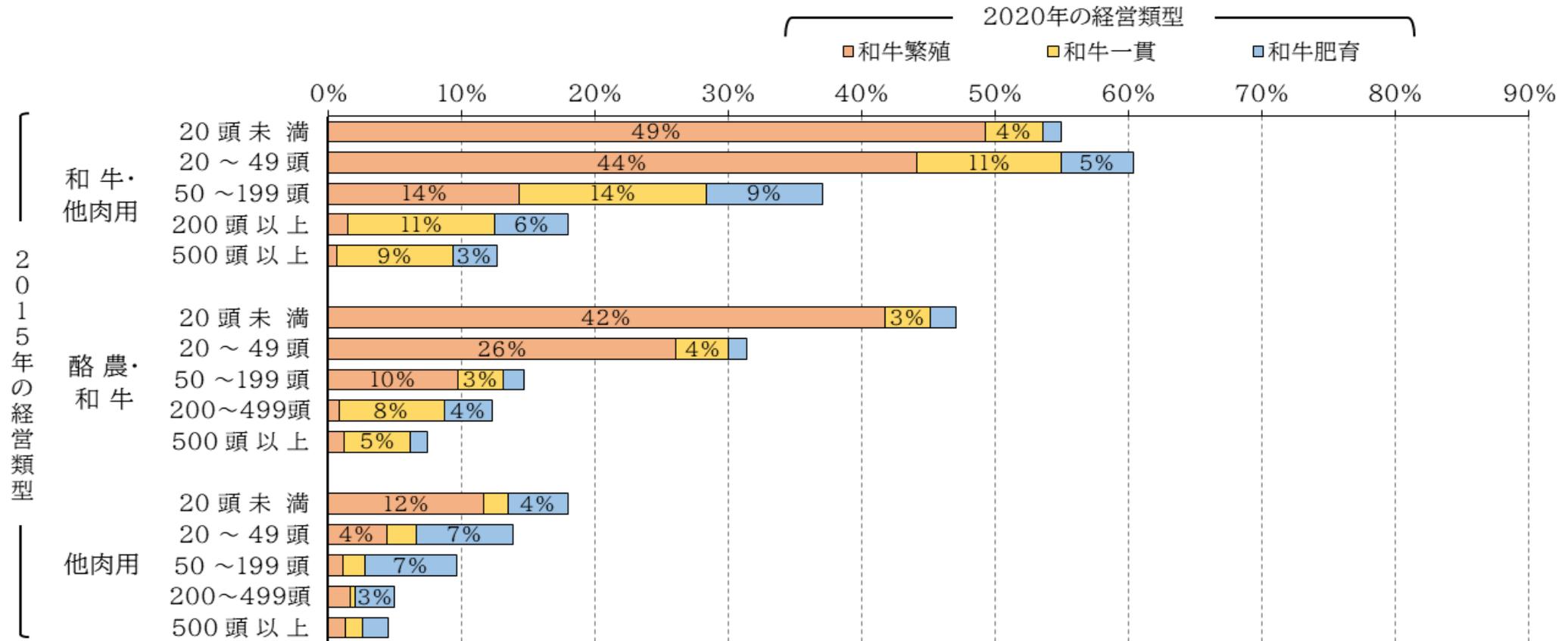


図8 和牛3類型への経営変化 (2015年:和牛3類型以外→2020年:和牛3類型)

資料:農林業センサス個票(2015年,2020年)の組替集計.

注.和牛3類型への経営変化割合が低い,「酪農・他肉用」及び「酪農」は省略した.

4. 繁殖和牛を飼養する経営体の動向

(1) 飼養頭数の増減状況による経営体の類型化

- 2015年あるいは20年に繁殖和牛を飼養している経営体を類型化（【頭数増減類型】）
 - 両年で繁殖和牛を飼養している経営体を「継続」とし，そのうち飼養頭数が5頭以上増加したものを「継続(増加)」，増減が4頭以内を「継続(維持)」，5頭以上減少を「継続(減少)」に区分
 - 2020年に繁殖和牛の飼養を中止した農業経営体を「飼養中止」，2020年センサスのIDがないものを「離農等 (20年ID非接続)」
 - 2015年には繁殖和牛を飼養しない農業経営体であったが，2020年には飼養しているものを「飼養開始」，2015年センサスのIDがないものを「新規就農等 (15年ID非接続)」

表6 繁殖和牛の頭数増減による類型化の基準と繁殖和牛飼養経営体数

		継続 (増加) n=3,844	継続 (維持) n=20,639	継続 (減少) n=2,101	飼養開始 n=2,860	飼養中止 n=5,870	新規就農等 (15年ID非接続) n=3,015	離農等 (20年ID非接続) n=7,509
農業経営体として存在	2015年	○	○	○	○	○	×	○
	2020年	○	○	○	○	○	○	×
繁殖和牛(子取り用めす牛)を飼養	2015年	○	○	○	×	○	×	○
	2020年	○	○	○	○	×	○	×
繁殖和牛飼養頭数の増減状況 (2015-20年)	5頭以上増加	○	×	×	X		X	
	増減4頭以内	×	○	×				
	5頭以上減少	×	×	○				

(2) 頭数増減類型別の飼養動向

- 2015年から2020年の5年間の繁殖和牛の増減頭数は、「継続（増加）」で**7.1万頭増**，「継続（減少）」の**3.0万頭減**を大きく上回る
- 「飼養開始」の経営体では**5.2万頭増**，「飼養中止」の**4.4万頭減**を相殺して8千頭の増加
- 「新規就農等」と「離農等」はそれぞれ9万頭弱の増減で同程度

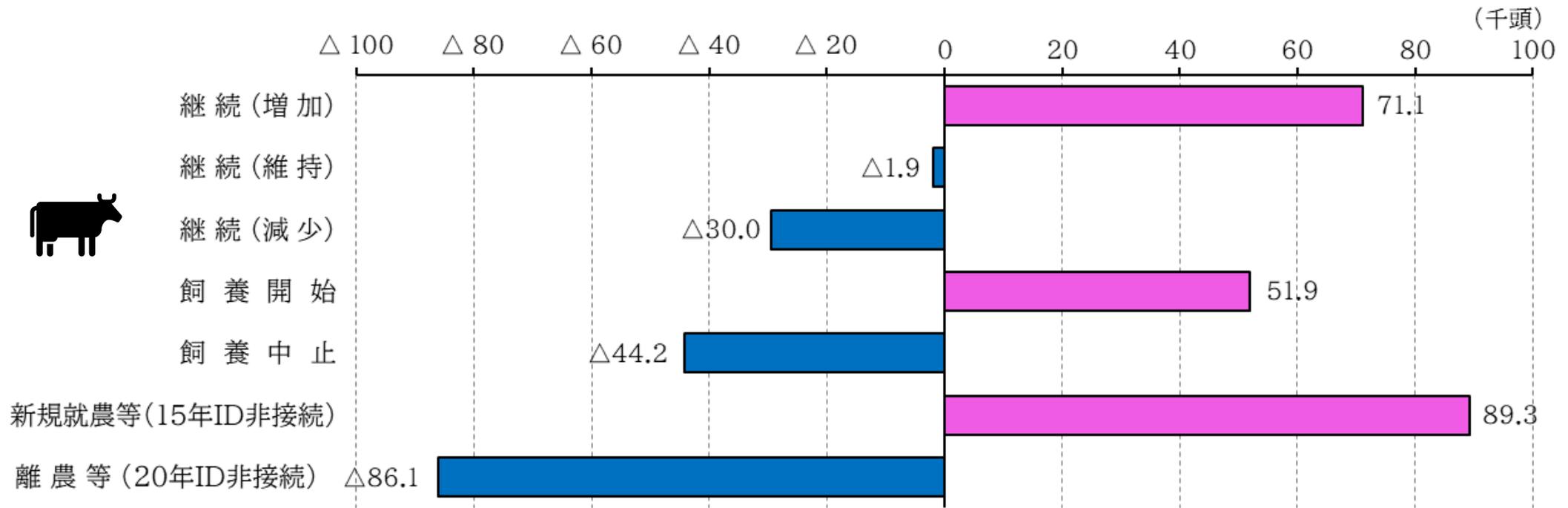


図9 繁殖和牛の頭数増減類型別の繁殖和牛増減頭数

資料：農林業センサス個票(2015年, 2020年)の組替集計。

(2)頭数増減類型別の飼養動向 (つづき)

- 「継続（増加）」において経営体数割合が高い飼養類型（2015年）は和牛一貫と酪農・和牛で**2割弱**，頭数規模では20頭未満層で**4%**，経営主年齢が70歳代以上で**3%**と低い割合
- 「飼養開始」は和牛肥育で**100%**，頭数規模が大きいほど経営体数割合が高く，「新規就農等」では経営主年齢**40歳代以下**で**22%**と高い。

表7 繁殖和牛の頭数増減類型別にみた経営体数割合

(2015年の区分)		経営体数計	継続 (増加)	継続 (維持)	継続 (減少)	飼養開始	飼養中止	新規就農等 (15年ID 非接続)	離農等 (20年ID 非接続)	【参考】 継続合計
合計		45,838 (100%)	8.4%	45.0%	4.6%	6.2%	12.8%	6.6%	16.4%	58.0%
経営 類型	和牛繁殖	31,741 (100%)	6.9%	53.5%	4.8%	1.0%	14.4%	-	19.3%	65.2%
	和牛一貫	4,261 (100%)	18.3%	43.7%	8.3%	2.3%	11.6%	-	15.8%	70.3%
	和牛肥育	328 (100%)	-	-	-	100.0%	-	-	-	-
	和牛・他肉用	1,428 (100%)	14.7%	38.6%	5.7%	6.2%	15.1%	-	19.7%	59.0%
	酪農・和牛	3,333 (100%)	19.9%	36.8%	4.4%	8.6%	17.2%	-	13.1%	61.1%
	その他	4,747 (100%)	-	-	-	36.5%	-	63.5%	-	-
飼養 頭数	20頭未満	31,249 (100%)	4.2%	55.6%	2.3%	1.5%	16.0%	-	20.2%	62.2%
	20～49頭	5,819 (100%)	21.4%	39.6%	13.4%	7.0%	7.0%	-	11.6%	74.4%
	50～199頭	3,683 (100%)	27.6%	22.9%	13.7%	15.7%	9.5%	-	10.6%	64.2%
	200頭以上	845 (100%)	30.2%	12.9%	10.4%	20.6%	12.3%	-	13.6%	53.5%
経営 主 年 齢	40歳代以下	5,402 (100%)	14.1%	33.2%	5.1%	6.7%	8.3%	21.7%	10.8%	52.4%
	50歳代	9,547 (100%)	11.6%	46.6%	4.5%	7.5%	12.4%	6.5%	11.0%	62.7%
	60歳代	14,606 (100%)	8.9%	53.4%	4.9%	6.4%	11.5%	3.9%	11.0%	67.2%
	70歳代以上	15,102 (100%)	2.9%	42.9%	3.9%	4.3%	16.1%	2.7%	27.2%	49.7%

資料：農林業センサス個票(2015年, 2020年)の組替集計。

注(1) 表側の「経営類型」「飼養頭数」「経営主年齢」は2015年の区分である。

(2) 「新規就農等(ID非接続)」は2015年のデータがないため、2020年の経営主年齢から5歳を引いた経営体数である。

(3) 「飼養頭数規模」には子牛を含まない。また、「経営主年齢」は家族経営体の数値である。

(2)頭数増減類型別の飼養動向 (つづき)

- 繁殖和牛の頭数増加に最も寄与したのは「新規就農等」で8.9万頭増、次いで和牛繁殖及び和牛一貫の「継続(増加)」がそれぞれ3.2万頭、1.9万頭の増加
- 頭数を減少させているのは、「飼養中止」(2.9万頭減)と「離農等」(5.1万頭減)、経営主年齢が70歳代以上、飼養頭数規模が20頭未満でそれぞれ合計3万頭以上の減少

表8 繁殖和牛の頭数増減類型別にみた繁殖和牛増減頭数(2015-20年)

(単位:頭)

(2015年の区分)		計	継続 (増加)	継続 (維持)	継続 (減少)	飼養開始	飼養中止	新規就農等 (15年ID 非接続)	離農等 (20年ID 非接続)	【参考】 継続合計
合計		50,516	71,058	△ 1,906	△ 29,559	51,856	△ 44,193	89,348	△ 86,088	39,593
経営 類型	和牛繁殖	△ 62,845	32,416	△ 2,495	△ 17,298	4,857	△ 28,826	-	△ 51,499	12,623
	和牛一貫	△ 17,917	19,326	185	△ 7,315	1,429	△ 7,901	-	△ 23,641	12,196
	和牛肥育	13,474	-	-	-	13,474	-	-	-	-
	和牛・他肉用	△ 687	7,506	△ 76	△ 2,945	2,892	△ 2,564	-	△ 5,500	4,485
	酪農・和牛	3,777	11,810	480	△ 2,001	3,838	△ 4,902	-	△ 5,448	10,289
	その他	114,714	-	-	-	25,366	-	89,348	-	-
飼養 頭数	20頭未満	△ 37,701	14,358	△ 2,415	△ 4,941	2,781	△ 18,315	-	△ 29,169	7,002
	20～49頭	△ 12,382	15,468	211	△ 8,137	4,861	△ 8,050	-	△ 16,735	7,542
	50～199頭	△ 8,206	19,869	265	△ 9,881	9,670	△ 9,240	-	△ 18,889	10,253
	200頭以上	△ 678	21,363	33	△ 6,600	14,409	△ 8,588	-	△ 21,295	14,796
	(飼養なし)	(109,483)	-	-	-	(20,135)	-	(89,348)	-	-
経営 主 年 齢	40歳代以下	33,506	14,385	191	△ 3,288	6,292	△ 4,313	31,593	△ 11,354	11,288
	50歳代	11,860	16,390	848	△ 5,614	9,557	△ 7,762	11,100	△ 12,659	11,624
	60歳代	△ 2,417	17,540	271	△ 8,484	11,058	△ 12,704	8,501	△ 18,599	9,327
	70歳代以上	△ 30,119	5,492	△ 3,231	△ 5,663	5,295	△ 12,943	3,189	△ 22,258	△ 3,402

資料: 農林業センサス個票(2015年, 2020年)の組替集計。

注(1) 表側の「経営類型」「飼養頭数」「経営主年齢」は2015年の区分である。

(2) 「新規就農等(ID非接続)」は2015年のデータがないため、2020年の経営主年齢から5歳を引いた経営体の数値である。

(3) 「飼養頭数規模」には子牛を含まない。また、「経営主年齢」は家族経営体の数値である。

- 肉用牛（和牛）の増加要因を経営体を類型化（個票データを利用し飼養形態によって、「和牛繁殖」「和牛一貫」「和牛肥育」（以上、和牛のみ3類型）、「和牛・他肉用」「酪農・和牛」「酪農・他肉用」「他肉用」に分類）して分析したところ、
- 肉用牛を飼養する経営体数は全ての飼養類型で引き続き減少、飼養頭数は和牛のみ3類型合計で10.6%減から4.6%増に（「和牛一貫」で18.5%増と高い増加率）
 - 繁殖和牛（子取り用めす牛）の飼養頭数増加（2015年から5万頭増）に大きく寄与したのは、飼養頭数が200頭を超える規模層の「和牛繁殖」と「和牛一貫」経営、これら大規模な経営体による飼養頭数シェアが一層高まる
 - 加えて、これまで飼養頭数が減少していた「和牛繁殖」の20～49頭、「和牛一貫」の50～199頭といった中小規模の経営体でも飼養頭数が増加に転じており、和牛生産への新規参入とともに他の品種を飼養する小規模な経営体からの「和牛繁殖」への転換が見られた

5. まとめ (つづき)

□ 飼料生産に着目した分析からは、

- 和牛のみ3類型合計の牧草専用地面積が2015年の4.8万haから2020年には6.0万haに (23.9%増) , 1経営体当たり面積も1.2haから1.9haに増加
- 「和牛繁殖」経営における1頭当たりの牧草専用地面積は、2005年の4.8 aから2010年で8.4 a, 2015年で9.5 a, 2020年では11.8 aと年々増加

□ 保有農業労働力に関する分析からは、

- 1経営体当たりの平均農業従事者数は、「和牛繁殖」経営でやや少なく2.4人 (男性1.4人, 女性1.0人) , 同経営では従事者の約半数が65歳以上であり高齢化が進展
- 規模が小さい経営体ほど高齢化が進んでおり, 65歳未満農業専従者がいる経営体割合が, 50頭を超える規模層では6~7割なのに対し, 20頭未満規模層では1割程度

- 飼養頭数の増減によって肉用牛経営をさらに類型化し、頭数の増加に影響を与えた経営体の特徴を分析したところ、
 - 「継続（増加）」の経営体が飼養頭数を大きく増加させており、特に、2015年の飼養頭数規模が20～49頭又は50～199頭、経営主年齢が40歳から60歳代の経営体で5年間の増加頭数が多い
 - 「飼養開始」の経営体では、2015年に「和牛肥育」であった経営体が1万頭以上繁殖和牛を増頭、特に経営主年齢が50・60歳代の経営体での頭数の増加が顕著
 - 「新規就農等」の経営体では、経営主年齢が40歳代以下で大きく飼養頭数を増加
 - 「飼養中止」及び「離農等」の経営体では、経営主年齢が60歳代及び70歳代以上層、飼養頭数規模が20頭未満の小規模経営で飼養頭数が大幅に減少、小規模な高齢農家の経営からの撤退が依然として大きな影響を与えていた

5. まとめ (つづき)

- 和牛生産は、飼料自給率が低いといった課題があるものの、若い農業者の所得確保、草地資源の有効活用といった面から、その重要性は一層高まっており、本分析からは、和牛を飼養する経営体の飼養頭数とともに牧草専用地面積シェアの上昇も確認でき、所得確保という観点からも和牛部門の重要性が改めて示された
- 和牛価格の高値が長期的に維持される補償はなく、今後も安定した生産を継続させていくためには、担い手の確保、飼料自給率の向上など、様々な課題への対応を一層進めていく必要がある

=== ご静聴ありがとうございました ===

